

●プレスリリース

菅原一剛__ Daylight | Blue

会期:2013年10月16日(水)—10月23日(水) 12:00~19:00

[2会場同時開催]

菅原一剛__Daylight

ギャラリー360°

東京都港区南青山5-1-27-2F(日曜・祝日休み)

Tel.03-3406-5823

www.360.co.jp

菅原一剛__Blue

ときの忘れもの

東京都港区南青山3-3-3 青山 Cube101(会期中無休)

Tel.03-3470-2631

www.tokinowasuremono.com

ゲストキュレーター: 仲世古佳伸(NAKASEKO ART)

協力:WOW

8月23日に、ヴィジュアルデザインスタジオ WOWにてプロデュース・制作した菅原一剛写真集『Daylight | Blue』が、BNN 新社より刊行されました。写真集には、デビューから約28年の間に制作された代表作が集約されています。

それにともない、ギャラリー360° と、ときの忘れものの2会場で、菅原一剛の出版記念写真展を同時開催することになりました。

写真家・菅原一剛は、大阪芸術大学の写真学科を卒業後、早崎治氏に師事し、商業写真を学びます。1986年にフランスに渡り、翌年フリーの写真家として活動を開始した菅原は、風景や植物、人物を被写体に数々のオリジナルプリントを制作してきました。近年は“光の温度”を写真にとらえる方法として湿板写真などを探求し、写真の古典技法とインクジェットプリントを組み合わせることで、今までにない、新しい写真の可能性に満ちた作品を制作しています。

ギャラリー360° では、写真集『Daylight』に収録されている2000年代から最新作までの中から、あたたかい光の世界をとらえた湿板写真の大型作品〈Amami〉と、〈Komorebi シリーズ〉、

〈Tsugaru〉などのプリントを数点展示します。また、今回の写真集のために WOW の制作したスライド映像を使ったインスタレーションを試みる予定です。

ときの忘れものは、写真集『Blue』に収録された1990年代の代表作である、ヴェネチアのサンマルコ広場にある列柱の表情を撮影した〈Correspondances〉のシリーズと、北欧のノルウェーで出会った、スタルハイムの滝の美しい水しぶきをとらえた〈Norway〉の中から、14点のプリントを展示します。

また、会期中の10月19日(土曜)午後3時より、菅原一剛さんと今展のゲストキュレーターである仲世古佳伸さんと一緒に、2会場を回るギャラリーツアーを開催します。ツアー終了後、ギャラリー360°にてオープニングレセプションを行います。是非、ご参加ください。

Daylight

光という存在は、目に見えるようでいて見えない不思議な存在です。

それでもぼくは、そんな光の中に存在している温度を、なんとしても写真の中に定着させたいと、そんな世界をずっと探し続けていました。

そして、とにかく自身にとってのあかるいところを探している中で、偶然にも奄美と出会いました。すると、その土地は眩ゆいばかりの光溢れるところであったのはもちろんのこと、そこに暮らす人々も含めて、とてもあたたかいところでした。そして今、奄美で感じたあたたかい光の世界を、不思議なことに北国の津軽の中でも見つけることが出来ました。

Blue

写真を始めて間もない頃、それがモノクロ写真だったこともあって、具体的に写っているもの以上に、むしろその世界に存在した“光の残像”のようなものが映し出されているような印象を受けました。そして時折、そんな一枚の写真の中に、そこに存在する色や香りが響き合うすがたと共に、自身の小さな思いのようなものを、偶然にも映し出されることがあります。ぼくは、そんな自身の日常の未分化な世界の中に、ある種の温度のようなものを探し続けていたのかもしれない。そしてそのすがたは抽象的でもなく、かといって具象的でもない、まるで夢のような世界でした。

菅原一剛 写真集『Daylight / Blue』 概要

発売:2013年8月23日

価格:6,300円

仕様:2冊1組 各 68P 320H x 257W mm

デザイン:丸山新(&Form)

発売:BNN 新社

出版:WOW

【プロフィール】

菅原一剛(写真家) Ichigo SUGAWARA

1960年札幌生まれ。

大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業後、早崎治氏に師事。

フランスにて写真家として活動を開始して以来、数多くの個展を開催。

1996年に撮影監督を務めた映画「青い魚」は、ベルリン国際映画祭に正式招待作品として上映される。

2004年、フランス国立図書館にパーマネントコレクションとして収蔵される。

2005年、ニューヨークの Pace MacGill Gallery にて開催された「Made In The Shade」展にロバート・フランク氏と共に参加。

また同年、「アニメ」「蟲師」のオープニングディレクターを務めるなど、従来の写真表現を越え、多岐にわたり活動の領域を広げている。

近年は、光の眩しさを写真にとらえる方法として、湿板写真などを探求し、写真の古典技法と最新のデジタル技法を組み合わせることで、今までにない新しい写真を作り出している。

2010年、サンディエゴ写真美術館に作品が収蔵される。

2011年、個展「The Bright Forest」Trunk Gallery, Seoul

2012年、個展「Tsugaru」Leica Ginza Photo Salon, Tokyo

【最近の主な写真集・著作】

「写真がもっと好きになる。」ソフトバンク・クリエイティブ刊

上高地帝国ホテル 75 周年記念写真集「神河池」帝国ホテル刊

写真集「DUST MY BLOOM」ソフトバンク・クリエイティブ刊

写真集「TSUBAKI」クレー・インク刊

「今日の空」ソフトバンク・クリエイティブ刊

【ウェブサイト】www.ichigosugawara.com

菅原一剛の写真／断章 仲世古佳伸

もう25年も前のことだが、菅原一剛が撮影したサンマルコの回廊にある大理石の列柱の写真を見たとき、僕は“肖像”だと思った。それと同時に、真正面に起立した肖像の数々が、不意に静かなマチエルをまとい、光や音や時間のざわめきたつ“抽象”のようにも映った。写真家の言う Correspondances(呼応)という言葉を使い出し、改めて写真と対面してみたが、このざわめきは一層の高まりを奏でながらも、静寂とした元の場所に立ち続け、毅然とこちらを向いたままだった。

頑固なまでのアティテュードと、狩猟者のまなざしで対象を写し取る写真家の眼の、何といさぎ良いことか。概念を嫌い、流行は他人に預け、菅原一剛はただひたすら“光のすがた”を追い求めていく。(Blue)

古典技法であるガラス板に、風景を定着して並べた湿板写真の作品がある。2003年に、奄美の森の中で撮影した木漏れ日をとらえたこの写真で、菅原一剛は「写真の物質性」と「光の形象化」を試みた。僕らは通常写真を重いものとして見ることはないが、ガラス板を用いたこの写真は、ズシリと重い。そして、粒子であり、あたたかい波動を発する形象としてとらえられた光の軌跡が、見るものの意識にゆさぶりをかけるのだ。

木漏れ日の写真で定着された光の形象は、サンマルコの列柱の、あのざわめいたマチエルと呼応しているように思う。写真家のめざす「あかるいところ」、「あたたかいところ」とは何処か。地上にあり、光から逃れられないものが最後にたどり着く、コレスポンドな場所であるに違いない。(Delight)

【プロフィール】

仲世古佳伸(アートディレクター) NAKASEKO Keishin

1955 三重県生まれ

1980 大阪芸術大学芸術計画学科卒業

卒業後、(株)イガラシステュディオに勤務し、五十嵐威暢のもとでCI、サイン計画などの仕事に従事する

1991 ナカセコアート設立

グラフィックデザイン・クリエイティブのアートディレクション、展覧会の企画・構成・キュレーション、テキストの執筆、アート作品の制作など、デザインとアートを横断する多義的な表現活動を行う

【主なキュレーションとディレクション】

1995～2000 アートイベント「モルフェ」の総合アートディレクション(東京青山周辺)

1996 「眼差しと視線01／02／03」(ミヅマアートギャラリー)

1998 「ゲームの規則」(ギャラリーアート倉庫／東京)

2002 「ひとりごっつー松本人志の世界展」(ラフォーレミュージアム原宿／東京)

2009 「オクターブ01／02」(TIME AND STYLE MIDTOWN／東京)

2010 「TDW-ART ジャラパゴス展」(東京デザイナーズウィーク2010／東京)

2011 「TARO LOVE 展 岡本太郎と14人の遺伝子」(西武渋谷店)

「ジャラパゴス展」(三菱地所アルティウム／福岡)

2012 「ジパング展」(高島屋／日本橋／難波／京都)

「えどがわ、アートな日和」(しのぎ文化プラザ企画展示ギャラリー／東京)

2013 「ワンダフル・マイ・アートー高橋コレクションの作家たち」(河口湖美術館／山梨)